

障害者の頼もしい友だちになる

全国障害者差別撤廃連帯ナム = ビョンジュン (南炳俊) 教育局長

“ 障害者運動が過激ですって？ 私たちは誰かを殴ったり、傷を負わせたこともありません。ですからそのような声には同意しません。私たちが地下鉄を占拠して、1時間でも延着したりすれば大騒ぎが起こるでしょう。そうして障害者を暴力的だということです。ところで地下鉄を占拠するということがどういうことかわかりますか？ 障害者は地下鉄にちょっと乗ろうと思っても1時間や2時間かかるんです。鍾路(チョンノ)3街3号線から5号線乗り換える時間だけで1時間かかるのですが、こういうことを考えてみたことがありますか？ ”



障害者ら、闘争のために勇気を出す

全国障害者差別撤廃連帯のナム = ビョンジュン(43)教育局長は、 障害者運動が過激だという見方があることに対してどう思うか という質問に首を横に振った。

しばらく考えこんだ彼は、言葉を選びながら、障害者らがどのように闘争するのか話し出した。2006年4月27日、重度障害者50人余りが漢江(ハンガン)大橋の北端150余メートルの地点で片道3車線を占拠し、ノドゥル島まで這っていく闘争をおこなった。活動補助者サービス制度の導入を要求して39日間座り込みを行った後のことだった。“ その日のその闘争をするために会議をしたことが思い出されます。重度の障害者らが最もいやがるのが何かわかりますか？ 這っている自分の姿を他の人に見られることです。その会議の時、障害者の同志らは、断食もやる、やれることはすべてやるが、人の前で這っていくことだけはできないといいました。そんなふうに考えていた障害者らが漢江大橋を這って行き来したのです。どれほどの勇気を出したことでしょう ”

世の中の人々は、彼らが道路を占拠したことを記憶しているが、彼らが占拠するまでの過程はわからない。いや、占拠ということを選択するまでに障害者らがどんな生活を送ってきたのか、それさえよくわからないのだ。

ナム = ビョンジュン教育局長は、1987年大学に入学し、学生運動に身を投じた。厳酷な独裁政権の時期、大学に入って石の一つも投げたことのない人がどこにいるだろうという彼は、自身が正しいと考えた世の中を作るためにただの一步も退かない生活を送った。大学を卒業した後、労働運動の世界に入った。1996年、ある労働団体に入った彼は当時30

万名だった縫製工場の労働者を組織することに必死になった。その時期彼とともに行動していた同志らは、結婚や子ども、お金の問題などで、一人、二人と運動から離れていった。

彼の人生が急激に変わったのは2004年だった。

人生を変えた正立会館民主化闘争

2004年、正立会館という障害者福祉館で、障害者らと労働組合が、会館側に対抗してストライキ闘争を行った。定年で退任した館長が再採用されたことに反発して“会館を民主的に運営してくれ”と求めた闘争だった。当時障害者らは8か月の間正立会館を占拠して闘争を行った。

会館側は暴力団まで動員した。つらい闘いだった。障害者らが鉄パイプで殴られる極限状況までうまれた。ナム局長は障害者らのそばで守った。2005年2月まで障害者らと一緒に暮らした。闘争がある日には共に闘い、闘争のない日には重度障害者活動の補助をした。

“障害者らと親しくなりました。そして彼らからたくさん学びましたよ”

障害者と一緒に暮らして変わったのは、ナム局長自身だった。8か月の間、自らの運動のやり方を振り返ってみた。“他人のために生きよう”と思っていたのに、自己中心的に運動したことが一つ一つ思い出された。

“結局、運動する人々も効率を中心に生きているんです。速度が遅い人々に対する配慮がないということでしょう。私たちの中でも障害が重い人が何できるのか、あの人は本当にだめだという見方がありました。資本の論理をそのまま身につけて生きているんです”

この頃、ナム局長は、自分より2歳若い障害者の同志に出会った。ナム局長がデモに夢中だった1987年、その障害のある同志は施設から逃げようと命をかけていた。最初に逃げた日には捕まって、脚が折れた。2度目に逃げて捕まった時は頭が割れた。3度目に逃亡を試みてやっと彼は自由を取り戻した。

“運動をしながら、私が世の中を救うことができると考えていました。そしてそれがとても傲慢な考えだということを知ったのです。私より2つ若いこの友人は人生をかけて闘争をしていましたが、私はその人の闘争自体を知りもしませんでした。自分がよくやってきたと思っていた運動が、この人にどんな助けになったのだろうか。私が考えていた運動が、もっとも苦しいところにいる民衆にどんな意味のある運動なのかを振り返ってみました。いつも私が見ている領域を絶対視していましたが、私が傲慢だったということを知ることができました”

障害者運動をしながら知った障害者らの現実

2006年からナム局長は本格的に障害者運動に飛び込んだ。障害者運動の現場でみた障害者の現実、思っていた以上に悪かった。

2008年水原(スウォン)にある華西(ファソ)駅でリフトの墜落事故が発生し、障害者1人が死亡する事件が発生した。障害者差別撤廃連帯ではそれ以前から“事故がおきるかもしれないので障害者たちのためにエレベーターを設置してくれ”と要求していたが、いつも返ってくる返事は“構造的にエレベーターの設置は不可能だ”というただ一言だった。

結局障害者1人が死んだ。そうしてやっとエレベーターが設置された。

安全要員もなしに障害者らが車椅子にからだを任せたまま地下鉄に乗ったり降りたりすることは、戦争のようなものだった。曲線のあるホームの場合、乗降の位置によって列車とホームの間隔が30cmも広いところがあったし、列車の高さとホームの高さが10~20cmも合わない駅もまだまだ多かった。障害者らはいつも事故の危険の中で生きてきたのだ。

この間、何よりも最近障害者らの間で問題になったのは、障害者らが街を占拠しながら作った障害者活動補助制、障害者年金制度であった。審査が厳格になっていき、支援を受けていた障害者が受けられなくなることもあった。このため、国家人権委員会に障害者らが直接陳情に行くことあった。

このように一つ一つ発生する問題を把握し、解決策を見出すために闘争をして、イ=ミョンバク政府とぶつかった。初めから障害者予算を十分に策定しておけば、すべての障害者福祉問題は解決することができた。

“ 障害者らが闘争の末に作った法律も、イ=ミョンバク政府になって一度にみんな持って行ってしまいました。私たちは保健福祉部にも会おうとしましたが、結局はイ=ミョンバク政府、ハンナラ党とどのように闘うかにかかっています ”

この頃の彼の悩みは、自分の運動から 新しいエネルギー を得ることだ。運動をするようになって20年をはるかに越えたナム局長は、自身の表現のどおりだとすれば、毎日毎日が危機だ。今日も集会、明日も集会、今日も会議、明日も会議という状況で、いつからか やらなかつたらと考える日 が増えた。 “ どうせ行っても同じ話が出るだろうから、いっそ雨でも降ったらいいのに ” と考える自分自身に気づく瞬間が危機だと考えた。

それで彼は日常の中に変化を探し始めた。同じ会議資料を作るにしても字体を変えたり、集会の司会者をいつもしていた人の代わりに新しい人に任せる。こういう小さい変化の中からエネルギーを得て、新しい想像力を探そうとする。

障害者が韓国社会を変えることができる

“ 労働者というとなんかことが思い浮かびますか？ たくましい腕、そんなこと考えませんか？ ところで腕がたくましくないとしたらどうですか？ 少し体がのろければそれはどうですか？ 労働が生産品1つをどれくらいの早さで作るかよりも、労働を通じて人間関係を結ぶことがより重要だと考えるならば、障害者の労働も当然の権利です。教育も同じことです。英語の単語をどれくらい早く覚えるのかが教育ではなく、教育を通じて関係を結ぶことを学び実現することが重要ならば、障害者は非障害者と共に教育を受けることができます。そのような日がくれば、入試のための競争教育も崩れるのではないでしょう。私が障害者が韓国社会を変えられると考える理由です ”

障害者に会うことから自らの人生を振り返り、新しい社会を夢見るナム局長は、活動家の運命を持って生まれた。ナム局長が願う世の中は、誰でもが人間らしく生きる暖かい社会なんだという考えがふと浮かんだ。

ナム局長が夢見る新しい社会が現実になる瞬間、その変化の真ん中で障害者らと肩を組んで明るく笑っている彼の姿を期待する。